

編集委員会便り

混迷の中で新年を迎えることになりました。おめでとうございます。1999年、西暦1000年代の最後の年となっていました。

経済、資源・エネルギー、環境がトリレンマの関係にある時代といわれてきましたが、果たしてこの矛盾を21世紀に向けて解決していけるのでしょうか。

わが国では、'90年代後半から、微量有害物質による環境汚染の問題が特に著しくクローズアップされてきました。公害や環境汚染を研究してきた者からみると、戦後経済の復興から急成長にかけての時に問題となったのは、排出源が明瞭であり、また、その影響が誰の目から見ても顕著である、たとえば硫黄酸化物による大気汚染や工場排水による水質汚濁のような点汚染源でした。これらの汚染は法制度の整備、技術の開発、重点的投資によって克服されてきました。その次にやってきたのが面汚染源の問題です。自動車の排気ガス、家庭排水など、個別の排出量は少量であるが、面的な拡がりをもち、加害者と被害者が重なっているやっかいな問題です。まだわれわれはこの問題を解決できていません。

そこにまた、われわれは内分泌攪乱物質（環境ホルモン）という分かりにくい一層やっかいな問題に直面することになりました。漠然とした恐怖といえますか、

今日明日の問題ではないようであるけれども、ひょっとすると人類滅亡に繋がる問題なのかも知れない。そのような問題に直面してしまったようです。この問題はわれわれの文化・文明といったものに深く関わっているようにも見えるので、一時のブームに流されることなく、腰を落ち着けてじっくり取り組むべきものなのかも知れません。

本号では、微量有害物質問題とその対策に関して新春座談会を開いていただいた内容を掲載しています。また、特集として「ダイオキシン—その問題点と対策の方向」というテーマのもとに斯界でご活躍の7名の先生方に執筆いただきました。昨年は各雑誌でダイオキシンが特集に取り上げられることが多かったのですが、本誌ではユニークさを出したくて、医学、薬学、工学の各分野の先生方をお願いをいたしました。

展望・解説、見聞記、書評、グループ紹介、技術・行政情報、ショート・ノート、談話室など、いつものように充実したものに出来上がったと考えています。また、研究論文2報を収録することが出来ました。お忙しい中、執筆いただきました方々にあらためて感謝申し上げます。

武田 信生

（京都大学大学院工学研究科環境工学専攻教授）